

No. 301【2018年4月6日配信】

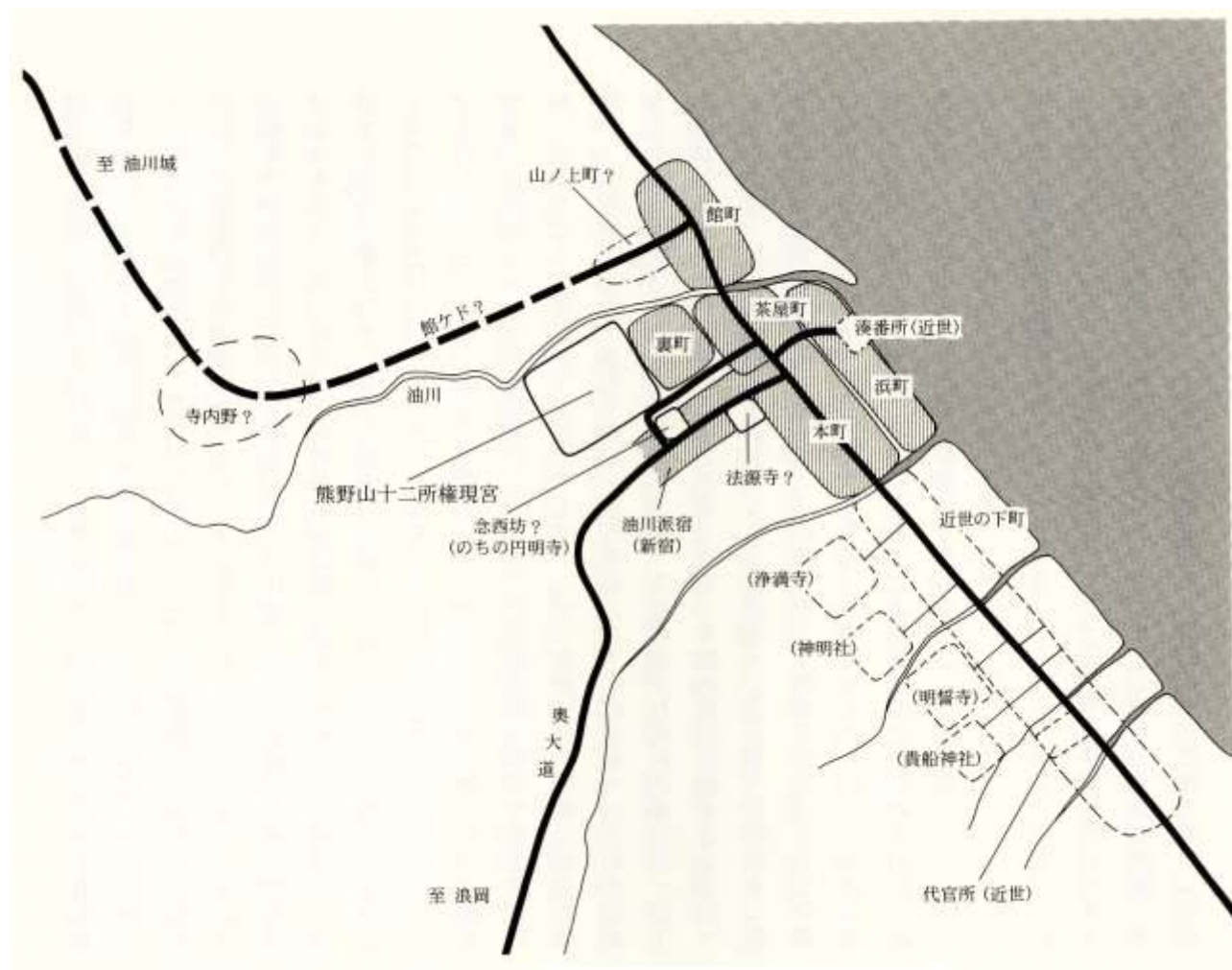
弘前藩が青森に新しい港町をつくったのはなぜ？(担当：工藤)

こんにちは！ 室長の工藤です。

4月4日付『東奥日報』でも取り上げられていたように、市長の記者会見のバックパネルが新しくなりました。東北の地図にコンパスと大型客船を配置したもので、これは「新しい町づくりの『海図』を描いていく決意を表現」するものと記事は報じています。

私は「港町青森」をイメージし、いわば「原点回帰」＝新しいスタートというような感想を持ちました。みなさんはどんな印象を持ちましたか？

さて、改めていうまでもないことですが、青森は津軽から江戸への米の廻漕を担うべく弘前藩庁によって町づくりが進められました。ところが、中世以来油川の港が広く知られ、港町としての賑わいをみせていたといいます。にもかかわらず、弘前藩庁は油川ではなく、この地に新しい拠点を作ったのです。



油川湊復元図
(『新青森市史』通史編第1巻)

では、どうしてこの地が選ばれたのでしょうか？

この問いに対する答えは、油川の港は水深が浅く大きな船の出入りには適さず、一方（後の）青森は「海は深く、港としても多くの船を出し入れすることができた」（『青森市の歴史』）というのが古典的なものとして知られています。しかし、藩政時代の記録をみると、青森は遠浅の入り海であり（「津軽道程帳」承応2年・1653）、しかも岩石が多く荒波の打ち寄せるような海岸（「津軽領分大道小道磯辺路并船路之帳」慶安2年・1649）だといいます。また、当時の船舶の航行に欠かせない「風向き」においても条件がいいとはいいがたく（同上）、青森はベストの港ではなかったのです。

ですから、この問いの答えを海の「浅深」に求めるのは難しいのです。むしろ、それでもなおこの地に新しい港町を作ろうとしたのか、それがつぎのなぞ解きになります。

そこで最近有力な説として注目されるのが、藩政時代以前の油川は政治権力が容易には立ち入ることができない「自治都市」であったという視点です。つまり、弘前藩庁は油川を忌避したというのです。また、青森となる地は「訪れる者なき寒（閑）村」と言われてきましたが、堤川の川湊を中核とする「港湾都市」があったという説も唱えられるようになりました。これは、まさに青森の町づくりにおいて重要な視点です。

これらの視点からどんな歴史像を導くかが課題です。

間もなく訪れる「『青森』400年」に向けて、私たちはこれまでの研究に学びながら、実証的な新しい「青森」像をこのメールマガジンなどを通じて提供していきたい…301回目をそんな「新しいスタート」としていきたいと思います。